「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	平成 29 年　9 月 13　日
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏　名	川口ゆり

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

ライデン、オランダ；　ウィーン、オーストリア

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

学会（the 5th student conference on behaviour and cognition 発表）および動物園見学

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

平成 30 年 9 月 1 日ー9 月 10 日

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

ライデン大学 マリスカ博士

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

9 月 1 日から 10 日にかけてライデン、オランダ；　ウィーン、オーストリアに出張したのでここに報告する。

Burgers zoo（アーネム動物園）

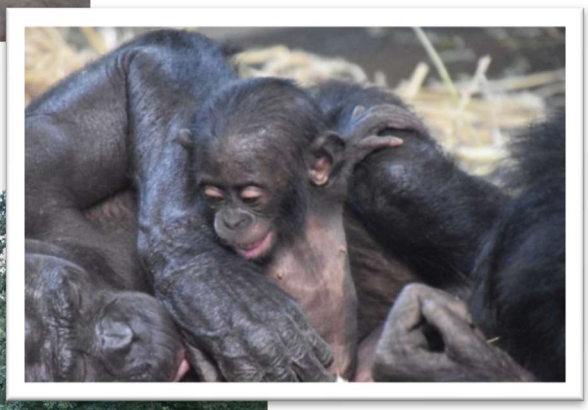
アーネム動物園は言わずと知れた、de Waal 氏などがチンパンジーコロニーの研究を進めてきた動物園であり、かねがね訪れたいと思っていた。チンパンジーは広い敷地内に暮らしていた。しかし、10 個体ほどが一か所に何となく集まっており、観察した時間帯のせいか、活動性はそれほど高くなかった。堀に落ちたトマトを必死に長い枝でかき寄せていた 1 個体のチンパンジーの姿が今まで de Waal 氏の著書を読んで思い描いてきた「アーネム動物園っぽさ」をなんとなく感じさせ、印象的だった。

上）大きな枝を使って堀のトマトを取ろうとするチンパンジー

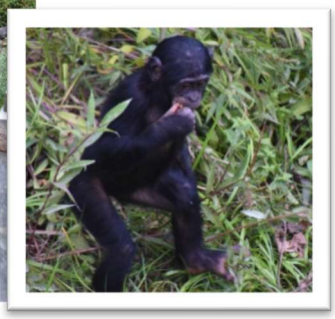
Apenheul zoo

ライデン大学学生の案内の元、彼女らが研究を行っている霊長類だけの動物園 Apenheul zoo を訪れた。結論から述べると、今まで訪れたどの動物園よりも良い動物園ではないかと感じた。まず、人と動物を隔てる格子は全くなかった。ほかの動物園でもそのような展示を見たことはあるものの、（ほとんど）すべての種に対して徹底して格子柵を設けていないのは感心した。多くの種ではサルがこちらに来られない構造になっているものの、タマリンのような小型のサルはヒトと隔てる溝すらなく、来園者を信頼しているからできることだと感じた。実際に来園者層もとてもまじめな印象を受けた。広大で自然な環境に暮らす霊長類を観察していると、展示されている生き物を見るというより野生に暮らす動物を勝手に見ている感覚に近く、ある種、例えばハヌマンラングールからボノボにうつっても、全く違和感なく一続きで見られるのが新鮮だった。また、野生下のように樹の合間にサルを発見する喜びもあり、とても良いと思った。ここでは、動物園が閉まっている冬季のみライデン大学の学生や研究者は研究を行っている。ただ、類人猿に対するタッチパネルやアイトラッカーのテストがほとんどのようで、これだけ素晴らしい環境が整っているにもかかわらず、観察などはおこなっていないのはもったいないと感じた。私たちにとっては閉園までいても満足しない思いだったが、ほかの学生らは研究対象でない霊長類にはそこまで興味がないらしく、霊長類研究所のユニークさを感じた。

左）30 cmほどの申し訳程度のロープのみでヒトと隔てられたベルベットモンキー。社会交渉も観察しやすい。

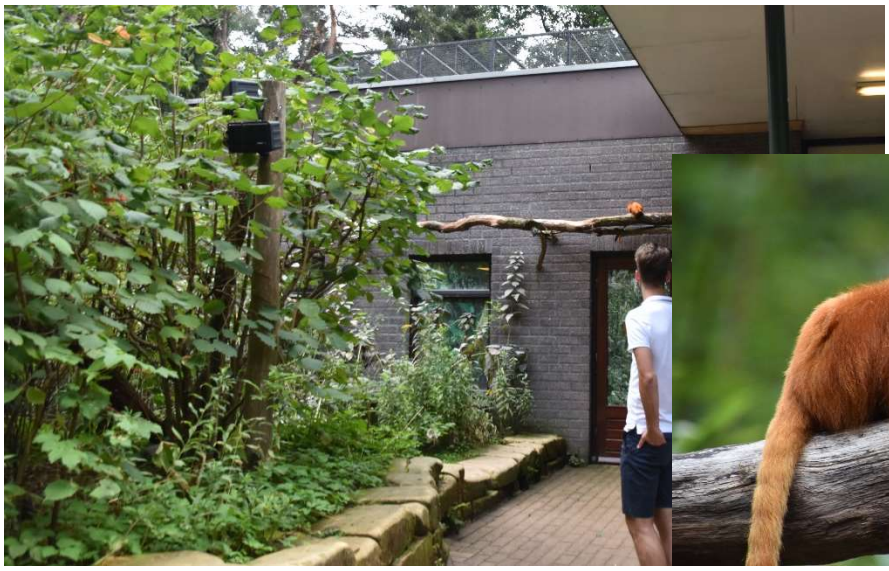


上）ボノボの乳児
下）ボノボのコドモ



上）右手にうっすら見える金網の手前がボノボ、奥がゴリラのエリア

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）



上）手を伸ばせば届く距離にいるゴールデンライオンタマリン

左）大型類人猿とヒトの表情の比較の展示。
わかりやすかった。

Student conference

この学会は昨年度訪れたウィーン大の学生たちが組織しているものだったので知った。内容がまさに自分の分野であったし、学生で組織しているという点も興味があった。学会に参加した感想としては、まさに学生主体であることによる長短両方があったと思う（長所のほうが大きかったが）。知識を得たり全く新しい手法に出会ったりするという点ではそれほど期待した情報は得られなかったかもしれない。修士・博士の学生の発表が主だったので、中には研究計画だけに終わるような人もいた。ただ、もちろん興味深い発表もあったし、Key note の発表者の話はどれも非常に面白く、示唆に富んでいた。一方、良かった点としては、通常の学会では常にきれいな有意差ばかりを目にするが、今回の発表では差がなかったり予測と全く逆の結果だったりした。思うように結果がでていないところがリアルで、自分だけでなくほかの学生も苦戦しながら研究しているのだということを痛感した。また、Web 上でそれぞれの発表者にフィードバックを送ることができるシステムなど、学生が組織するからこその新しい試みもあり良いと思った。自分の発表については比較的うまく話せたと感じた。聴衆を見て、前日に Participant の紹介など Method に重点を置いたスライドに変更したのが功を奏したと思う。広いホールでマイクなしだったが、大事なところは伝わったと感じた。一方、英語に関しては、まだまだネイティブやそれに近い学生と比べるとどうしても議論の理解が劣っていると感じるのが悔しいので鍛錬したい。さらに、この学会のような若手の国際的なシンポジウムを組織すること自体に興味を持ったので、学生のうちに自分もできればと思った。だんだん、同じ研究領域の国外の博士課程の学生と知り合う機会が増えるのがありがたい。学会終了後、研究施設を見学するツアーがあり、オオカミとイヌの研究を行っている施設を見学した。そこではオオカミとイヌを同じように飼育し、問題解決行動をはじめとする研究をおこなっている。オオカミとイヌの比較研究についてはよく聞く機会はあったが、実際に 2 種とも目にすることができ、特にコンパニオンアニマルとしてではない、群れで暮らすイヌを見るのは初めてだったので興味深かった。両種ともに基本的な訓練をうけていた。また、タッチパネル課題を行う部屋やトレッドミルの装置などもみせてもらい、訓練士から話を伺った。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

上左から時計回り）学会の集合写真、Wildpark Ernstbrunn 入口、オオカミ、イヌ

Tinbergen の地から Lorenz の地へ

奇しくも、ライデン大学とウィーン大学はそれぞれノーベル賞受賞者である Tinbergen、Lorenz が研究をおこなった場所だ。そのような場所を実際に訪れることができたのは意味深い。特にウィーンでは学問を支える土壌だという印象を強く感じた。例えば、街中の観光名所のようなところで一般人をうまく巻き込む形で Science communication がおこなわれていた。それも、日本では興味がある人だけが行くという形だと思うが、ここでは観光客でも子ども連れでもふらっと入れる気軽さとセンスの良さがあった。日本にもこのような形の場があればと思った。ウィーン大学構内には、貴重であるはずの宝石や様々な骨格標本があくまで控えめにさりげなく廊下に並んでおり、毎日何気なくこういうものを目にすることからもインスピレーションを得るのではと思った。さらに、今回訪れた 2 か国でいろいろなところからの学生と話をし、ほかの国、研究室の学生の現状が少しわかってきたのが収穫だった。例えば、学位をとるのに多くの論文の出版が必要なところもあれば、博士課程の学生が修士課程以下の学生を指導したり講義をしたりしなければいけないところもあるのを初めて知った。また、ワークライフバランスに関する考え方もそれぞれだった。博士課程修了後のキャリアことも考えると、そういう知識が増えたのはとてもよかった。

左）Maria-Theresien-Platz（美術館）でのサイエンスカフェ。テントでそれぞれの展示があり、学会運営の主体であった研究室の展示もあった
右）ウィーン大学内に突如現れる骨格標本の一部

６．その他（特記事項など）
また今回の出張は PWS プログラムの支援を受けておこないました。記して感謝申し上げます。